論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　　教育学　　）	氏名	藤　尾　　か　の　子
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育の特質

論文審査担当者

主　　査	教　授	三　村　　真　弓
審査委員	教　授	七　木　田　　敦
審査委員	教　授	丸　山　　恭　司

〔論文審査の要旨〕

本論文は，モンテッソーリ・メソッドが実践へと移行された 1907 年から現在に至るまでの音楽教育の実際を明らかにすることを通して，モンテッソーリ・メソッドに基づく音楽教育の特質を解明することを目的としている。具体的には，モンテッソーリ・メソッド全体の基盤を築いた M.モンテッソーリをはじめとし，彼女と共に音楽教育の確立に寄与した A.M.マッケローニと E.B.バーネット，及び，1970 年代から 2017 年までモンテッソーリ・メソッドに基づく音楽教育に携わった J.K.ミラーの 4 者に着目している。

論文の構成は以下である。

序章では，本研究の問題意識と研究の目的，先行研究の概要を述べている。

第 1 章では，モンテッソーリの音楽教育に焦点を当て，モンテッソーリの音楽教育論及び音楽教育カリキュラムを明らかにすることを通して，彼女の音楽教育観の特徴について論じている。モンテッソーリの音楽教育観の特徴は，最終的に子どもが確かな音楽的感覚と音楽的概念に基づいて自由に音楽を創作したり，音楽を深いレベルで聴くことを目指すことにあったと結論付けている。

第 2 章では，マッケローニの音楽教育に焦点を当て，マッケローニの音楽教育論及び音楽教育カリキュラムを明らかにすることを通して，彼女の音楽教育観の特徴について論じている。マッケローニの音楽指導法は，幼児期から児童期の発達段階に応じている点において教育的配慮が見られるが，創造的で表現的な内容というよりは，音楽的要素の概念化・理論化に重点が置かれた内容であると指摘している。

第 3 章では，バーネットの音楽教育に焦点を当て，バーネットの音楽教育論及び音楽教育カリキュラムを明らかにすることを通して，彼女の音楽教育観の特徴について論じている。バーネットは，リズム活動を通して，子どもの自由な表現を促すことを目指したが，彼女の実際の指導法は，子どもがリズムを習得するまで，教師の演奏する曲を繰り返し聴かせ，その曲のリズムに子どもが自力で身体を合わせて動くことを求めている。このことから，バーネットのリズム活動は，リズム感覚の育成に主眼が置かれていることは明らかであり，課題中心主義的な立場であると結論付けている。

第 4 章では，マッケローニの孫弟子にあたるミラーの音楽教育論及び音楽教育カリキュ

ラムを明らかにすることを通して，彼女の音楽教育観の特徴について論じている。ミラーの音楽指導法の特徴を，創造性，協働性，他領域との関連性，という 3 つのキーワードから明らかにしている。ミラーの音楽カリキュラムにおいては，創造性が色濃く反映されており，各領域で創作の技法を培うための活動が配置され，最終的には創作の技法を自由に組み合わせることで，より高度な創作を行うことが目指されていると結論付けている。

以上を総括し，終章では，上記 4 者各々の音楽教育の内容を整理することによって，モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育の位置付けと特質について論じている。モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育を，モンテッソーリが自身のメソッド全体を通して子どもに育成しようとした「創造性」，すなわち，子どもが自分自身の特別な目的を実現する能力，及び，社会生活において他者と関わり合う中で自己を貢献させることのできる能力の育成を実現する役割を担っているものとして位置付けている。一方，モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育の特質は，ミラーが協働性や領域横断型という新たな要素を取り入れた音楽教育として再構築したことによって，モンテッソーリの教育思想に一貫して流れる人格形成のための「創造性」の育成を可能にしたことと結論付けている。

本論文は，以下の 3 点において高く評価できる。

1. 上記 4 者それぞれの音楽教育観の特徴を明らかにすることを通して，モンテッソーリ・メソッド開始時から現在に至るまでのメソッドにおける音楽教育の全体像を解明している点である。本論文は，国際モンテッソーリ協会に保管されている非公開の史料を数多く検討することによって，4 者各々の音楽教育を，音楽教育論，活動内容，指導法，教具・教材の視点から精査している。その上で，個々の音楽教育観と 4 者の音楽教育に共通する特徴を明示している点に重要な価値を見出すことができる。

2. モンテッソーリ・メソッドの中核的な理念である創造性が，音楽教育を通してどのように育成されるのか，という新たな視点を示している点である。モンテッソーリ・メソッドは，モンテッソーリの教育理念の上に成り立つ組織的な教育法であるため，理念的部分を含めて音楽教育を明らかにする必要がある。本論文では，モンテッソーリが定義する創造性を正確に解釈した上で，ミラーの音楽教育が創造性の育成に貢献すると結論付けており，モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育の価値を新たに見出したと言える。

3. モンテッソーリ・メソッドに基づく音楽教育を，メソッドの枠組みと音楽教育の 2 つの側面から捉えることによって，現代の幼児教育への適用の可能性をミラーの音楽教育に見出した点である。本論文では，マッケローニ及びバーネットの音楽教育が技術や能力の育成に傾倒していたのに対し，ミラーがモンテッソーリら 3 者の音楽教育を引き継ぎながらも，アメリカにおける音楽教育の現代化の影響を受け，協働的かつ領域横断型の音楽教育として再構築したことを具体的な活動例と共に明らかにしている。これまで，モンテッソーリ・メソッドにおける音楽教育は独自の方法論と教具体系に基づいて行われるが故にメソッドの枠組みでしか語られてこなかったが，本論文によって幼児の音楽教育に新たな知見を提供することができたと言える。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成　30 年　2 月　28 日